

# 令和8年度 生活・総合部会研究計画

## 1 研究主題

### 自ら学びを創り出す子供の育成

—「これ、やってみたい!」を「やってよかった!」につなぐために—

## 2 研究主題について

### (1) 主題設定の理由

本部会は、価値ある学習材や地域素材を大切にした指導計画の作成や探究的な学習が発展し続ける単元づくりをすることで、子供の興味・関心が高まり、主体的な学習活動の展開につながることを明らかにしてきた。その中で、子供が自らの興味・関心や問題意識にもとづいて課題を設定したり、教科等の学びを活用したりしながら、試行錯誤を重ね、課題解決に主体的に取り組むことには依然として課題があることも確認された。そこで、令和6年度より「自ら学びを創り出す子供の育成」を研究主題として研究を進めている。

令和7年度には研究主題の解明に向け、海陽町立海南小学校において研究大会を開催した。地域や学校、そこに関わる人々、自然や社会など、子供の身近な生活に根ざした指導計画を基に、思考ツール・ICTの効果的な活用、振り返りの充実を図りながら学習活動を展開した。その結果、子供たちの興味・関心、解決・解明したい課題へと高まり、主体的に課題解決を図ろうとする姿につながった。

また、令和7年9月の中央教育審議会教育課程企画特別部会で論点整理がとりまとめられた。そこで示された、『好き』（興味・関心）を育み、『得意』を伸ばしながら、それらを原動力として学び全体への動機付けを図っていく取組と、当事者意識を持って、自分の意見を形成し、多様な他者と対話や合意を図る取組を同時に進め、これらが有機的に関わり高まっていく教育課程に変革していく必要がある」という考え方は、本部会の方向性に合致する。教師が教育観を転換し、子供の主体的な学びを支援する伴走者となることを目指していくことが重要であると考えます。

そこで、今年度は、教師の在り方に着目し、引き続き研究を進めていく。

### (2) 「自ら学びを創り出す子供」とは

自ら学びを創り出す子供とは、実社会や実生活から生まれた切実性のある課題（思いや願い）に対し、身近な「ひと・もの・こと」に自ら働きかけ、他者と協働しながら、よりよく課題を解決し、自分自身の成長に気付いたり、自己の生き方を考えたりすることで、主体的に新たな学びに向かう子供のことである。

### (3) 『これ、やってみたい!』を『やってよかった!』につなぐために

自ら学びを創り出す子供の育成に当たっては、子供自身が学習過程において「これ、やってみたい!」を「やってよかった!」につなぐことが重要であると考えます。

子供は興味・関心が高く、自分にとって切実な思いや願いが生まれ、自分事として本気で取り組みたくなる課題に出会う時、「これ、やってみたい!」と思う。その思いを起点に、主体的に対象に働きかける過程で、対象の特徴やよさ、手応えに気付き、「なぜだろう」「どうしてだろう」という好奇心や、思いや願いを実現しようとする探究心が育まれる。探究的に学ぶ子供は「見通し」→「実行」→「振り返り」→新たな「見通し」という学びの循環を、自らが身近な社会や自然へ働きかける中で繰り返し経験する。対象との関わりを振り返り、次の行動を考える経験を重ねることで、子供は学び方を自ら調整し、より自覚的に学ぼうとする態度を身に付けていく。さらに、対象だけでなく、自分自身の姿を振り返ることで、自己の変容や成長を実感し「やってよかった!」という思いから、新たな「これ、やってみたい!」という次の学びへとつながっていくと考える。

このような子供を育成するために教師は学習過程において、子供が抱いた「これ、やってみたい!」という切実な思いや願いを単元終末まで育み、「やってよかった!」と感じられる充実感や達成感、学習の有用感へと意図的につなぐ支援をすることが求められる。そのためには、教師自身の教育観を問い直し、本当に子供の「これやってみたい!」という思いや願いに即したものになっているかを問い続けながら、学習を進める必要がある。

### 3 研究内容

#### (1) 「これ、やってみたい!」を「やってよかった!」につなぐカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントには、「カリキュラム・デザイン」「PDCA サイクル」「内外リソースの活用」の3つの側面がある。この3つの側面を意識し具現していくことで、子供は自ら学びを創り出していくようになる。

##### ① 意図的・計画的・組織的なカリキュラム・デザイン

学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、目標の達成に必要な教育内容を、生活科・総合的な学習の時間を中核とし、組織的に配列する。また、幼児期の教育や中学校教育との接続を図り、生活科と総合的な学習の時間の系統性を考慮し、学びの連続性を保障する。

##### ② PDCA サイクルによる指導計画の改善

子供の興味・関心や発達段階、学校の実態、地域の特性等を踏まえ、年間指導計画・単元計画を作成・実施・評価して改善する。また、実際の子供の姿に応じて柔軟に計画を改善していく。

##### ③ 地域の特性を生かすための内外リソースの活用

教育内容と教育活動に必要な「ひと・もの・こと」などの資源を教材化し、活用する。また、教育資源のリスト（マップ、人材・施設バンクなど）にまとめ、校内で共有し、日常的に活用できるよう整備する。

#### (2) 「これ、やってみたい!」を「やってよかった!」につなぐ学習活動

##### 【生活科：気付きの質を高める学習活動】

生活科における気付きは、対象に対する一人一人の認識であり、子供の主体的な活動によって生まれるものである。無自覚だった気付きが自覚されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすることを、気付きの質が高まったといい、生活科は、特に自分自身についての気付きを大切にしている。

本部会では、以下に示す気付きの質を高める学習活動を実現することにより、「やってよかった!」という充実感や達成感、学習の有用感を味わうことができると考えている。その手応えが今度は新たな「これ、やってみたい!」という思いや願いを生み、子供は自ら学びを創り出していく。気付きの質を高める学習活動を展開するには、子供の思いや願いを生かし体験活動を充実させ、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動とが豊かに行きつ戻りつする相互作用が欠かせない。

##### ① 子供の思いや願いを生かす学習活動

生活科では、まず、子供一人一人の思いや願いを生かす学習活動を展開し、意欲や主体性を高めることが大切である。そのため、子供の興味・関心を踏まえ、学習対象との適切な出会いの場を工夫するとともに、じっくりと関わるができるように時間的な余裕をもつことを大切にしたい。また、思いや願いがさらに膨らむような学習活動を展開することにより、身近な生活に関わる見方・考え方を生かしながら、さらなる活動に広げたり、深めたりできるようにすることも必要である。

##### ② 充実した価値ある体験活動

生活科では、対象に直接関わる具体的な活動や体験が欠かせない。その活動や体験を価値あるものにするためには、子供の実態に応じているか、地域の特性を生かしているか、繰り返し対象と関わったり試行錯誤して挑戦したりすることができるか等の視点をもって、体験活動を工夫することが必要である。

##### ③ 伝え合い学び合う表現活動

伝え合い学び合う表現活動は、子供一人一人の気付きの質を高めていく上で重要である。そこで、子供の学びの多様性を生かしながら、振り返り表現する機会を設けたり、伝え合い交流する場を工夫したりする。その際、教師が子供の発言や思考を見取り、気付きを広げたり深めたりするような支援も必要となる。また、発達段階を考慮し、多様な表現方法を工夫することも大切である。

## 【総合的な学習の時間：探究的な学習活動】

子供の「これ、やってみたい！」を「やってよかった！」につないでいくためには、探究的な学習活動の質を高めていくことが必要であると考えます。質の高い探究的な学習活動とは、子供一人一人の思考や行動・好奇心の芽を一層大切にするとともに、他者との対話や協働、自己調整を通じて好きや得意を伸ばし、夢や希望を育み、自らの人生を舵取りする力に繋げていく取組を一層重視することである。質を高めるためには「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」これらの学習活動を繰り返し、連続して発展させることが重要となるであろう。

この探究のプロセスを支えるのが探究的な見方・考え方である。探究的な見方・考え方とは、各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰してとらえ、実社会、実生活の課題を探究し、問い続けるというものである。探究的な見方・考え方を働かせながら、多様な他者と協働し、横断的・総合的な学習に取り組むことにより、探究的な学習活動はより深まるだろう。

以下に示す、学習活動を実現することが、「自ら学びを創り出す子供」を育むことにつながる。

### ① 探究のプロセスを充実させる学習活動

探究的な学習活動では、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の一連のプロセスを繰り返し行う必要がある。これまでの取組では、「情報の収集」や「まとめ・表現」については多様な学習活動が展開され、探究的な学習を充実させることにつながった。一方、探究的な学習活動をより深めるためには、どのように課題と出会わせ、自分事とするのか（「課題の設定」）、収集した情報を子供自身がどのように吟味し、より深い学びへとつなげるのか（「整理・分析」といった点において、より一層充実させることが求められる。

探究の過程	配慮事項など
「課題の設定」	「ひと・もの・こと」に直接関わる体験活動や、学習対象との出会わせ方、関わり方などを教師が意図的に設定し、自らの課題をもつことができるようにする。また、子供の興味・関心や発達段階を踏まえ、これまでの考えとの「ずれ」や「隔たり」、対象への「憧れ」や「可能性」を感じさせることができるように工夫する。
「情報の収集」	設定した課題の解決に向け、どのような情報が解決に役立つのかを見通し、手段を自ら選択して必要な情報を収集する活動を充実させる。
「整理・分析」	子供が活発に「比較する」「分類する」「関連付ける」などの思考をすることができるよう、思考を可視化することを意識し、どのような方法で情報の整理や分析を行うかを決定することができるようにする。また、収集した情報を子供自身が吟味し、その情報を知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら課題の解決に取り組むことができるようにする。
「まとめ・表現」	「整理・分析」した結果を、「誰に」「何のために」伝えるのかという目的意識や相手意識を明確にして再構築する活動を充実させる。

探究のプロセスを充実させるには、情報活用能力や言語能力の育成が欠かせない。情報技術を活用して、言語と言語以外の情報を効果的に組み合わせたり、情報を再構築したり、自らの身体では難しい創作などを行ったり、学校外に広く発信したりするなど、課題に応じて適切に指導することが大切である。

### ② 多様な他者と関わる協働的な学習活動

協働的な学習活動を行うことで、多様な情報に触れ、その情報を異なる視点から検討することができる。また、多様な他者と交流することで相手意識や仲間意識を生み出すこともできる。このような活動を経ることで、一人一人の考えのよさや可能性に気付き、自分の考えを深め、視野を広げて課題の解決に向かうことができるようになる。

### (3) 「これ、やってみたい!」を「やって、よかった!」につなぐ指導と評価の一体化

学びを通して、「これ、やってみたい!」から「やって、よかった!」と変容・成長していく子供の姿を見取り、価値付け、新たな学びへと導くためには、指導と評価の一体化を図ることが重要である。

指導と評価においては、子供が自分自身の変容や成長に気付くことができるよう、一人一人の学びに着目するとともに、教師の指導改善と子供の学習改善の両視点から、指導と評価の一体化を図っていくことが求められる。

そこで、以下に示す視点に取り組み、指導と評価の一体化を目指すことにより、自ら学びを創り出す子供の姿が実現すると考える。

#### ① 育てたい資質・能力を明確にした単元目標の設定

子供、学校、地域の実態、生活科・総合的な学習の時間の目標から、育てたい資質・能力を明確にし、単元目標を設定する。

#### ② 具体的な姿による評価規準の設定

単元及び授業において評価の観点を適切に定め、目指すべき子供の姿を具体的な姿で想定し、評価規準を設定する。

#### ③ 適切な評価計画の作成

指導計画に応じて、誰が、いつ、どこで、どのように評価をするのか、特定の観点到評価が偏らないよう評価規準をバランスよく位置付ける。また、一人一人の子供の学習状況及び成長の様子や変化を公平に見取ることができるよう、評価の場面や方法を工夫する。

#### ④ 教師の指導改善

評価計画に沿って行った評価の結果から、指導方法を適宜見直し、改善していく。

#### ⑤ 子供の学習改善

評価の結果を子供自身が把握することを通して、学習の意義や価値に気付くことができるよう、評価を伝える方法を工夫する。また、観点別評価規準には示しきれない子供一人一人のよい点や可能性、進歩の状況についても伝え、評価の結果が子供の学習改善につながるようにする。

## 4 研究の進め方

### (1) 各郡市部会において

- ① 研究主題及び副主題の解明に向け、授業研究会及び研修会を行う。
- ② 各種研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有化を図る。

### (2) 各校において

研究内容の(1)(2)(3)に取り組み、実践を充実させる。

## 参考文献

小学校学習指導要領解説 生活科編 平成29年7月

小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成29年7月

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 生活 令和2年6月

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 総合的な学習の時間 令和2年6月

今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 令和3年3月

教育振興基本計画 令和5年6月

中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点整理 令和7年9月25日

中央教育審議会教育課程部会 総則・評価特別部会(第4回) 令和7年12月15日